

森は海の恋人，川は仲人

—森を創り海を守った常呂漁協の挑戦

常呂町はホタテ産地として大きな成功を収め、日本はもとより海外でもその高い品質の常呂町ホタテはひっぱりだこである。現在、漁民の生活も安定し、後継者も数多く育っている。しかし、こうした産地を形成するまでには様々な苦難の歴史があった。ここでは、常呂町のホタテ生産が歩んできた苦難の時代をトレースするとともに、漁協婦人部がどのようにして海を汚染から守り、漁業資源を保全してきたかをレポートする。

まず、常呂方式と呼ばれる高品質かつ安定的なホタテ生産システムを確立するまでの経過を常呂町漁協の平出参事は次のように語ってくれた。

どのようにして常呂方式と呼ばれるホタテ生産システムを成功させたか

「元々このオホーツク海、特に常呂沖合はホタテ資源が生息していた場所です。文献を見ると、大正時代から

常呂町漁業の苦難の歴史を語る常呂漁協の平出参事

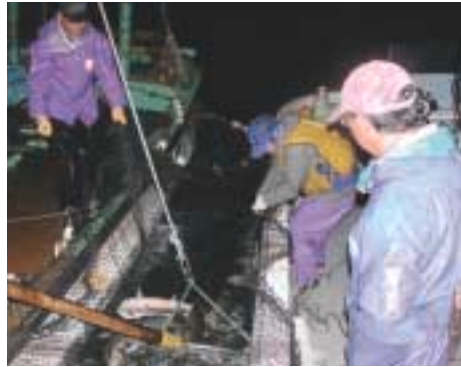


幻想的なサロマ湖の夕日





常呂の漁業の中心 ホタテ漁とサケ漁



常呂漁業を支える川口組合長



ホタテの干し貝柱を国内のみならず主に香港へ輸出していたという記述があります。当時は、資源管理という発想がありませんでしたので、たくさん捕れば捕ってしまふ。その結果、その後数年間はホタテが発生しない。そうしたことの繰り返しで生活は安定しませんでした。いかに生産量を平準化して、所得を安定させるかが大きな課題でした。昭和30～40年代に、学者、漁協、漁業者が一体となって、ホタテ生産の安定化を試みました。その結果、サロマ湖でホタテの稚貝を越冬させる技術が確立されました。それまでは、結氷するサロマ湖でのホタテ稚貝の越冬はできないと考えられていました。しかし、研究の結果、稚貝は湖の深い場所に沈下させておけば、越冬できることがわかりました。

ホタテは年に1回6月頃に放卵しますが、その卵を採取する技術が次に開発されました。タマネギやミカンを販売する時に利用していたネットに卵が付着する性質があることがわかったのです。その結果、それに卵を付着させて、1年間サロマ湖で4～5cmに生育して、それをオホーツク海に放流するという技術が完成しました。さらに、オホーツク海で捕り尽くされないための工夫を考えました。これが、『4年輪採方式』です。品質の良いホタテは外海で4年間育ててから収穫します。そのため、ホタテを育てる海域を4つに区分して、サロマ湖から稚貝を毎年1か所ずつ放流して、4年経過したホタテを収穫するという方式を確立したのです。これによって、生産量と価格が安定し、ホタテ業者の生活は大きく安定することになりました。

こうした常呂漁協の一連のホタテの生産管理システムを確立するに当たっては、大学、水産試験場、そして漁協、漁業者が一体となった研究システムが存在したこと

が大きいですね。先生方には、ホタテの成長速度、放流密度、大きさなど、様々な貴重なデータを集めてもらいました。」

このような苦勞の末に確立した現在のホタテの生産システムを、常呂漁協の窪田課長は次のように整理している。

「常呂漁協の正組合員は178人で、共同で出資して漁船を購入してホタテ事業を展開しています。178人全員で1つの企業体を形成していると考えてください。所有している船は14トンが12隻、常呂漁協と佐呂間漁協で共同管理する調査船が1隻、警戒監視及び漁場管理を専門にする船が1隻の計14隻を保有しています。これらの船は補助金を一切使わず、全て自己資金で購入しました。出資者はオーナーですから、乗組員を雇用してホタテ漁をします。オーナーが船に乗ることはありません。ホタテ漁の収入は178人で平等に配分します。サケ定置網漁も常呂漁協ではこの方式で行っています。ですから、組合員の結束力が非常に強いのです。また、漁場環境を守ろうという意識も高いのです。」



「ところ さかなマップ」の下敷き

しかし、こうした成功の背景には様々な苦難の歴史があり、多くの関係者の血のにじむような努力の結晶が現在の安定を支えていることを忘れてはならない。こうした苦難の歴史を平出参事は、次のように語ってくれた。

わずかな環境の変化で、 海の生態系が破壊されることを経験

「この地域は戦前は『カキ島』とも呼ばれていました。それくらいカキが捕れました。すごく大きい天然ガキが湖一面で捕れたのです。それは、外海と湖が隔絶されており、真水でカキが大量に生産されていたからです。しかし、あまり恩恵を受けなかった人々が昭和4年に西側に新湖口をあけて外海と繋げてしまいました。その結果、塩分濃度が高まり、カキが生育しなくなりました。

本当に一夜にしてカキが捕れなくなってしまうというのが、当時の人々の驚きです。そのことをおじいさん、おばあさんからよく聞かされて、この地域の人々は育ってきました。ですから、漁業で生きている自分たちの生活を支えている海は、生態系の微妙なバランスの上に成り立っているということを常呂の人々はよく知っています。そのため、海を守るための様々な活動を展開しているのです。」

こうした海を守るための活動として、常呂漁協が実施したのが植林活動であった。これが「森は海の恋人、川は仲人」という有名な言葉を生み、漁業関係者による植林活動の輪を大きく広げていった。こうした植林活動のきっかけと苦労話を常呂漁協の婦人部のリーダーで推進役であった新谷さんに伺った。

「戦後、常呂川の上流に澱粉工場やパルプ工場ができました。当時は、何も規制がありませんでしたから、廃



海を守る活動を展開した新谷さん

液は全て川に流していました。川で浄化させるということでしたが、澱粉のカスやオガクズが川下に流れました。秋にサケ・マスが川を遡上するときに、それらの不純物がエラに入り、河口でサケ・マスが川を遡上できずに死んでしまいました。戦前の常呂川の水は洗濯や飲み水として利用しており、非常にきれいでした。当時の常呂の漁民は、サケ・マス漁で生計を維持していたため、大きな打撃を受けました。また、戦前に燃料として森林を伐採してしまったため、秋の台風の時期や雪解け水による土砂流出で海が真っ赤になってしまいました。このことから、『森がなければ川は復元しない、海は守れない』と思うようになりました。

また、オホーツク海の沿岸では戦前に牧場が営まれていましたが、戦後になって経営が成り立たず離農跡地になっていました。そこを、漁協で購入して『魚付き林』という名前を付けて保安林にし、昭和50年代から植林を始めました。トドマツ、カシワナラ、イタチハギ、カシワ等の広葉樹と針葉樹を混植するようになりました。ほとんど漁協組合員の奥さん方の労力奉仕で行いました。木を植えるのは6月頃で、ホタテの稚貝の養殖が一番忙しい時でした。しかし、みんなは仕事の合間を見ながらカップズボンをはいたまま、『1本でもいいから植えるよ』と言って来てくれました。それが年中行事みたいになって、



10年以上続けました。

その効果は顕著で、森からきれいな水が流れてくるようになりました。また、保水効果が大きく、土砂の流出が随分抑えられるようになりました。」

こうした植林活動の影響は各方面に現れ、森を守ろうという動きが道内各地の漁業関係者の間で広がっていった。しかし、効果が現れるまでに10年以上の長い年月が必要な植林活動を支えた原動力は何であったのか。その点を新谷さんに伺った。

木を育てるのは 子供を育てるのと同じです

「常呂漁協では、常呂川の上流部にサケのふ化場をもっていました。当時水が不足してきました。その原因を北海道大学の先生に調査していただき、牧場の跡地や離農した農家の畑の跡地をクマザサが覆って保水力が落ちていることが原因であることがわかりました。そのため、行政や離農した農家と交渉をしてふ化場周辺の山を購入して植林をしました。これまではサロマ湖周辺の平坦な場所での魚付き林の植林だったので比較的楽でした。しかし、この山での植林は本当に大変でした。6月の忙しい時期にバスで1時間半かけて山に入り、クマザサが生い茂り、あちこちに開拓後の切り株がある場所にエンピツのように細い苗木を植えたのです。果たして育つかどうか非常に不安でした。『こんなに辛いなら父さんと船に乗って働いてた方が儲かったなぁ』などと思ったりもしました。ボランティアなので、苦情も出てきました。しかし、次の年に山に入ると、植林した細い枝から小さな葉っぱが出ていました。『鹿にも食べられないで、よく雪の下で一冬堪え忍んだなぁ』と感動しました。この感動を知って以来は、不満は一切なくなり、4年間連続して植林しました。木を育てるのは子供を育てる



地域の小学生も植林活動に積極的に参加

のと同じです。ですから女性に向くのです。平成15年度にこの植林した場所を見に行きましたが、立派な林になっていました。思わずお母さん方から『植林した時に自分の植えた木に名札を付けておけば良かったね。そうすれば、何十年か経って子供や孫が見たときに、“この木はうちのお母さんやおばあちゃんが植えた木だね”と言ってくれるのにね』と声があがりました。

また、最近では小学5年生の社会科の時間を使わせてもらって子供達を全員連れて植林をしています。子供達に自分たちの活動を伝えるとともに、自然の豊かさ、自然の尊さ、生き物の素晴らしさと生命の神秘を伝えていきます。

こうした地道な活動の成果が認められ、平成4年には漁業団体としては全国で初めて『第10回朝日森林文化賞』をいただくことができました。」

効果がすぐに現れない植林活動が、常呂町の漁業の繁栄を陰で支えた最大の功労者である。こうした活動は植林だけにとどまらず、オホーツクの自然環境や資源の有限性や大切さを人々に認識させることとなった。また、次世代に対する教育面でも着実に成果を上げている。今後の夢と課題を新谷さんは、次のように語ってくれた。

これからの課題は 農業・林業・漁業の連携です

「あと7年経つと、組合は100周年を迎えます。そのため、現在100万本植樹事業を展開しています。現在までの植林面積は204ha、56万本になっています。また、平成6年からは分収造林事業にも参加し、積極的に植林を進めています。さらに、伐期に達した分収林を伐採さ



着実に広がる植林活動の輪

せない運動も展開しています。昨年、国と80年間伐採しない契約を結びました。植林活動の成果は、すぐには現れてきません。私たちは、自分たちの代で成果を出そうとは思っていません。子供や孫に素晴らしい環境と漁業資源を残せば良いと考えています。

これからの課題は、何といたっても農業、林業、漁業の連携でしょうね。この地域の川はそのほとんどが3面をコンクリートで固めているので、大雨の時に水の流りが早くなり、周りの柳とかの木を根こそぎ流してくる。本当に流木の被害がひどい。また、河川敷での酪農が許されているので、水が汚染されてしまう。しかし、酪農家にも生活があるので、止めてくださいとは言えない。肥料袋やポリ容器、タマネギなどが多く流れてきて、川下はゴミだめようになってしまう。農業と水産業の共生システムを確立することは本当に難しい。また、常呂川上流にはゴルフ場やばんえい競馬場があります。そういう場所での農業撒布の際は、必ず立ち会っています。その他にも秋のサケ・マスの河川遡上時期には週1回河川パトロールもしています。

しかし、こうした活動には限界があります。農業、林業、漁業に従事する人びとがもっと話し合っ、本当に皆が共生できる地域をどのように創造していくか考えていかなければなりません。そのためには、行政による調整、大学の先生方による問題解決に結びつく研究データの提供が不可欠です。また、消費者の方々の応援も必要です。こうした活動を展開することにより、このオホー



環境を守る活動はワッカ原生花園の保全に繋がる

ツク地域は豊かな生活、活力ある産業、そして豊かな自然環境に恵まれた日本を代表する個性的な地域になると確信しています。また、こうした活動が今後展開されるであろうことは、オホーツクの海を守る後継者が数多く確保されされていることから強く期待できます。」

また、最後に新谷さんは、次のようにオホーツクの魅力を語ってくれた。



常呂漁協の屋上にそびえる活動の精神

オホーツクの人々は 自然と一体で生きる自然体が基本

「やはり、オホーツクが他の地域と違うのは流氷が来ることです。流氷が来ることによって、豊かな資源をこの地域に残してくれます。シベリアの森林地帯を流れるアムール川の水は、大地の栄養分を含んだ流氷となって、その恵みを私達に届けてくれます。この流氷がとけて豊かな栄養を放出し、プランクトンを発生させ、そして豊かな魚介が育つといわれています。また、オホーツクには海だけでなく、豊かな大地と森、川があります。ですから、ここに暮らす私たちは、のんびりなんでしょうね。のんびりだから考え方もおらかです。不漁の原因は多くは天候なので深く考えて悩んでも仕方がない、とにかく自然に逆らわないで農業・林業・水産業をやっています。自然をコントロールするなんてちっとも思わないことが、自然体の生き方に繋がり、資源を守ることに繋がっているのです。『森は海の恋人・川は仲人』の精神です。」

(レポーター：門間敏幸・藤枝 隆)